

平成29年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について－

区　名	淀川区
学 校 名	大阪市立西中島小学校
学校長名	武林 富二男

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成29年4月18日（火）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準向上の観点から、児童の学力や学習状況を継続的に把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

- (1) 教科に関する調査（国語、算数）
 - ・主として「知識」に関する問題（A問題）
 - ・主として「活用」に関する問題（B問題）
- (2) 質問紙調査
 - ・児童に対する調査
 - ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・西中島小学校では、第6学年 22名

平成29年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

○平均正答率

国語A、算数A・Bにおいては「対大阪市比」よりも上回っていた。「対全国比」よりも下回っているが、少しの差まで縮まっている。

国語Bにおいては「対全国比」よりも若干下回ったが「対大阪市比」と、ほぼ同じポイントであった。

○平均無答回答率

国語A・B、算数A・Bの全てにおいて「対全国比」「対大阪市比」よりも下回り、算数Aにおいては0ポイントであった。本校の児童は学習に真摯に向う姿勢がこのことからもわかる。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕

「話すこと・聞くこと」においては、A・B両方とも「対全国比」「対大阪市比」よりも大きく下回っている。「書くこと」は、Bにおいては「対大阪市比」よりもポイントが下回っている。「読むこと」においてはA・B両方とも「対大阪市比」を上回り、Bでは「対全国比」よりも上回っていた。問題形式において、Bは、記述式の割合が増えたことも平均正答率を下げた要因と考えられる。

〔算数〕

A・B両方とも「数と計算」「両と測定」「数量関係」においては「対大阪市比」を上回っており、Aでの「量と測定」は「対全国比」を上回っている。「図形」においては、Aでは「対大阪比」よりも若干上回っている。習熟度別少人数授業等の実施において、互いの意見を交流する場を多くとってきた効果が現れたものと考える。しかし、知識の定着に課題があると考える。

質問紙調査より

質問62「授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思う」に対して「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」で90ポイントを超えた。日々、習熟度別少人数授業において、スマートスティップでの振り返りを行っており、この事が学習の定着にもつながっていると考える。

質問73・84「国語・算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」に対して肯定的に回答した児童は、全国や大阪市よりも低かった。基礎・基本的な学習をていねいに行い、学力の定着を図るとともに、多くの体験の中から知識を相互に関連付けて、より深く理解させる場面を構築したい。

今後の取組

- ・どの教科においてもいろいろな実体験を通して既習事項と重ね合わせ知識を活用させることによって、自らの学びとなるように実体験等の活動を増やす。
- ・双方向のコミュニケーションの力を伸ばすことによって、他者の考え方や自分の思いや考えを文章や言葉にする場面を多くする。そして、子ども同士・子どもと指導者・子どもと地域の人、本を通して本の作者などと対話する場面をつくる。
- ・算数における発表の仕方については定着してきており、この学習形態は継続する。そして、学習のより確実な定着を図るために繰り返し学習を授業の中に組み込む工夫をする。また、子ども達が見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習を振り返って、次につなげる学習方法を体得するように支援する。